

“FORTE”

社会医療法人 仁愛会

浦添総合病院

Urasoe General Hospital

#042

病院探訪
沖縄編



全国の特徴ある
病院を取材する
『フォルテ』

日本列島 病院探訪



Interview: ドクターズマガジン編集部
Text: 田口素行
Photograph: 緒方一貴



Interviewee
病院長補佐 兼
循環器内科不整脈 部長
仲村 健太郎
Kentaro Nakamura

Interviewee
病院長
伊志嶺 朝成
Tomonari Ishimine

循環器内科
主任部長
上原 裕規
Hiroki Uehara

整形外科
医長
武藤 亮
Akira Muto



充実のプレホスピタルケアと“最先端”で 沖縄全域の高度急性期医療を支える

那

那覇 覇空港から北に車で約30分。編集部が向かうのは県都那覇市の北に隣接し、琉球王国発祥の地としても有名な浦添市だ。

目的の地は、2023年12月に移転開設したばかりの浦添総合病院。抜けるように青い広大無辺な空の下に、7階建ての近代的な白亜の外観の輪郭がくっきりと浮かび上がっている。屋上ヘリポートからドクターヘリが発着する光景は、浦添総合病院の機能と強みを象徴的に示している。

浦添総合病院は沖縄浦添病院として1981年に開院。86人の職員と12人の医師からスタートし、現在では1000人超の職員数と130人もの医師数にまで増加した。県内に3施設ある救命救急センターの一つであり、沖縄県ドクターヘリ事業の基地病院として離島を含む沖縄本島の三次救急を担っている。

全国の多くの病院が衰退・縮小傾向にあるなか、浦添総合病院には優れた人材が集まり、常に発展しながら高度な医療ニーズに応え続けている。その強さの本質に迫るため、病院長の伊志嶺朝成氏らに話を伺った。

次のページへ



開業以来、救急に力を注いできた
高度急性期医療に強い病院



エントランスアートウォール
「太陽の岩」

病院の正面玄関を入ると、琉球石灰岩の大きなアートウォールが迎えてくれる。エントランスの天井は高く、

廊下も広々として開放的だ。白壁に木目調がアクセントとなった院内は、上質なホテルのような温かさや落ち着きがあり、病院特有の重々しさや慌ただししい雰囲気は一切感じない。それは生き生きとした職員たちの姿によるところも大きいだろう。

2023年、肝胆膵外科高度技能指導医でもある伊志嶺朝成氏が病院長に就任した。伊志嶺氏はこう語る。

「病院というのはPatient First（患者様第一主義）が基本で、一番大切であることはもちろんですが、職員の幸せも同じように大切だと考えています。職員が幸せでなければ、患者さんを幸せにすることはできません」

浦添総合病院は開設以来、地域住民のニーズを満たす医療と



高度急性期医療

「現場に出動した医師による早期医療介入や、現場から医療情報が救命救急センターにリアルタイムで共有されることで早期に治療方針の決定・準備ができ、患者さんの生命予後、機能予後が大きく改善されています。現場から救命救急センター、専門診療科による決定的治療、集中治療専門医による高度集中治療を経て退院までを院内のみならず地域の医療機関と共にシームレスに提供できることが強みです」



救命救急センター長
米盛 輝武



沖縄県浦添市

浦添市は米軍基地がもたらすアメリカ文化と、琉球王国発祥の地としての深い歴史を併せ持つ街。写真は「国立劇場おきなわ」。沖縄の伝統芸能である組踊や琉球舞踊などの定期公演が行われる



Interviewee

浦添総合病院を漢字一文字で表すと

仁

仁愛会職員は慈悲深い愛情を持って患者さんを助け、お互い尊重し支え合う関係を築きます。自分だけでなく他人の幸福も願い、共感と思いやりを持って社会に貢献します。「患者さんの幸せのために」、「当院で働く全ての職員（パートナー企業含む）の幸せのために」、「地域から選ばれ愛される病院」を目指します



病院長 伊志嶺 朝成



同時に、職員の働きやすい環境の構築にも取り組んできた。病院機能の核は高度急性期医療（救急医療）とがん診療だ。他の診療科でも急性期医療に対応するための高度な医療提供体制が整っている。

救急医療は1981年の開設当時から力を注ぎ、県内に3施設ある救命救急センターの一つとして、24時間365日、重症患者の救急を受け入れている。年間の救急患者数は約1万7000人。救急搬送件数は約5400件。さらにドクターヘリ（搬送人数）377件、ドクターカー（搬送人数）415件という実績を誇る。浦添総合病院の高度急性期医療が担う医療圏は沖縄全域といっても過言ではない。

「沖縄県の人口は約146万人で、そのほとんどが中南部地域に集中しています。病院が位置する浦添市は54万人の南部医療圏と74万人の中部医療圏の境目にあり、そうした位置関係から南部だけではなく中部医療圏もカバーしています。さらに北部医療圏や離島の急性期医療もドクターヘリで対応するなど、沖縄全域の高度急性期医療を支えています」（伊志嶺氏）



救急の強みはドクターヘリやドクターカーに代表される。プレホスピタルケアだ。2005年に仁愛会単独でドクターヘリ事業を開始し、2008年には沖縄県の補助事業として認められ、基地病院となった。2012年からドクターカーシステムを運用し、現在は2台保有、うち1台は高規格救急車を採用する。また、病院救命士の養成にも力を入れている。2023年には搬送前の患者の状態を把握し、搬送後すぐに最適な処置ができるシステム「NEXT Stage ER」を県内で初めて導入した。さらに旧病院時代には病院から離れた場所にあったヘリポートが新病院では屋上に設置されたことで、迅速な受け入れが可能となった。

初期研修と専門研修の特徴

プライマリ・ケア教育に優れており、初期研修プログラムでは成人の急性期疾患のマネジメントに重点を置く。救急は12週の研修期間と2年間を通してERでの当直研修を行う。院内の必修科目は、内科、救急科、麻酔科、外科、脳神経外科となっており、各連携施設の特徴を生かした院外研修も可能。研修医がERで自信を持って救急初期対応ができるよう、オリジナルの救急初療標準化コース「SPAM」による Off the Job Training も充実。

新専門医制度下では内科・総合診療・外科・救急科の専門研修プログラムの基幹施設となっており、いずれの診療科でも軽傷から重症・集中治療まで幅広い症例を経験することができる

「肝胆脾外科高度技能専門医 研修施設B」となっており、高度技能指導医/専門医が3人在籍しています。高難易度の肝胆脾手術にも対応できます」
(伊志嶺氏)



さらに、県内の民間病院として初めて災害拠点病院の指定も受けるなど災害医療体制も充実しており、直近では能登半島地震へのDMATによる災害派遣にも対応。災害医療コーディネーターも在籍しており、コロナ禍では県全体の入院状況を把握し、感染者の効率的な入院調整ができる情報共有システム「OICAS」を開発運用するなど、沖縄県の新型コロナ対策にも大きく貢献してきた。



最新の

「ハイブリッド手術室」を完備

「例えば、経皮的ペースメーカーリード抜去術は重篤な合併症を起こすこともあり、その場合は開胸も必要。この手術ができるのは全国で70施設ほどで、かつ指導医資格を有しているのは私を含め10人ほど。ハイブリッド手術室が完備されたことで、こうした手術もより万全の体制で行えるようになりました」(仲村氏)



最先端システムの導入



スマートベッドシステム



循環器内科と心臓血管外科は「循環器センター」として毎週カンファレンスを行い、常に十分な連携を図りながら最善・最先端の治療を安全に提供できるように努めている

2科から成る「循環器センター」



Hospital Data

▼ 救急患者数 (年間)

約 **1万7000** 人/年

▼ 救急指定

3 次救急

▼ 病床数

334 床

▼ 医師数

138 人

うち専攻医 **24** 人

うち初期研修医 **25** 人

“最先端”を積極的に導入し 医療の質向上と業務効率化を図る

さらに新病院となって県内の急性期病院では初となる「スマートベッドシステム」も全病床に導入された。ベッドサイドの専用端末に患者情報が集約されて

起きていません」

新病院では混合病棟から疾患別の病棟構成となり、機能的な施設配置による導線の最短化によって業務効率が上がリ、専門性の高いチーム医療が可能となった。各病棟は同じ規格で統一され、面積は旧病院の1・5倍、スタッフステーションは3倍もの広さとなり、適切な距離が確保できることにより感染症対策にも非常に有効に働いていると、病院長補佐兼循環器内科不整脈部長の仲村健太郎氏は言う。

「当院は新型コロナウイルス感染症重点医療機関として重症患者を多く受け入れてきました。コロナ禍ではほとんどの病院でクラスターが発生しており、当院でも万全の感染症対策をしてきましたが、旧病院でもクラスターを防げませんでした。しかし、新病院になってからは一切起きていません」



表示され、昼夜の日常生活自立度(ADL)や安静度、食事、転倒リスクなどをピクトグラム(絵文字)で分かりやすく表示することができ、さらに電子カルテとも連動しているため、院内のどこからでもアクセス可能で治療方針が迅速に決定できるなど、業務が大幅に効率化された。

浦添総合病院では新病院になる前から積極的に「最先端」を導入しており、より良い医療サービスの提供を追求し続けている。「循環器内科では2019年から医療の地域格差解消や若手医師の教育を目的として、遠隔映像配信システムにより治療の様子を生中継する取り組みを行っています。当時、国内では2例目で、心臓カテーテル分野では初の試みです。2022年から

はスマートウォッチで計測した心電図結果をもとにオンライン受診ができるApple Watch外来も始めました(仲村氏) さらに診療の質向上を支援するAI問診「ユビーメディカルナビ」を2019年に県内で初導入したのも浦添総合病院だ。これによって問診時間が短縮され医師の業務負担も大きく軽減された。伊志嶺氏は「医療環境

働き方改革



救命救急センターとしての特性上、複数診療科において時間外労働の上限はB水準、C-1水準が適用され、当直中は宿日直許可を取得しない勤務体制を敷く。宿日直時間は労働時間とみなされるが、救急集中治療部には専攻医を含め多くの医師が在籍しているため交替制勤務が可能。当直明けはDuty Freeなど、規制を超えない体制が整う



人工膝関節手術支援ロボット「ROSA Knee システム」を導入

「これまで術者の感覚や経験値によって判断されていた最適な骨切量や角度、人工関節の装着位置などが数値化されることで、手術の精度が常に担保されています。手術の「感覚」が「数値」で明確になるため医師教育にも有用です」



整形外科医長 武藤 亮

遠隔映像配信システムによる手術の生中継

遠隔映像配信システムを利用し、カテーテル手術の様子を生中継の様子。別室で視聴し、手術中の医師とリアルタイムで治療について話し合う



「遠隔医療を導入したことで、医療格差解消とともに若手医師の教育にも役立っています」
循環器内科主任部長 上原 裕規



のアップデートにより、職員の働き方も大きく改善されています」と、自信を持って言う。こうした「最先端」の積極的な導入は、医療の質や患者安全の担保だけではなく、仕事の効率化による職員のストレス軽減や働きやすさにも直結しており、「医師の働き方改革」を大きくバックアップしている。

職員の幸せを追求し誇りを持って働ける病院に

「職員が幸せでなければ、患者さんを幸せにはできない」という伊志嶺氏の強い信念は、法人理念でもある「働き甲斐のある職場」、「仁愛会の職員であることが誇れる企業」にも通じている。「患者さんの幸せのために」、「当院で働く全ての職員(パートナー企業含む)の幸せのために」、「地域から選ばれ愛される病院」を目指す。この想いを胸に刻みながら、患者さんの医療ニーズに応え続けていきたい」浦添総合病院が発展し続けている理由はここにある。

の若手医師たちが集まってくる。2024年6月からは、より納得感のある人事考課に変更するなど、医師をはじめ多職種の高い専門性と、一人一人の個性や強みを存分に発揮できる充実した教育体制や職場づくりにも伊志嶺氏は力を注ぐ。「医師、看護師、医療技術者といった各専門職を多職種全体で育てる教育プロジェクトが進行中です。さらに高校生向けにオー

今回、探訪した病院

社会医療法人 仁愛会
浦添総合病院
〒901-2102
沖縄県浦添市前田1-56-1

